教員の職務の必要性についての教員による捉えに関する調査研究

教職実践開発専攻　坂本　裕・三尾寛次・日比光治
石原　隆・伊藤智子・太田千香子
小島伊織・高橋清仁・高橋美穂
土肥義史・古田康子・町野千恵子
宮田　望・安田晋一郎

はじめに

近年の学校教育における課題の複雑・多様化、学校現場を取りまく環境の変化への対応、そして、2010年から10年間で教員全体の約３分の１に当たる120万人の教員が退職し、経験の浅い教員が大量に誕生することへの対応を見据え、教員が教職生活の全体を通じて不断に専門性を高めていくことを支援するシステムづくりが喫緊の課題となっている（中央教育審議会教員の資質能力向上特別部会、2011）。そうしたことへの対応も含めて、教員免許更新制度が開始され、その改善の検討も進められている（教員免許更新制度の改善に係る検討会議、2013）。

教員の専門性を高める研修システムを受講者である各教員が自己の課題と捉え、学修していくことができるようにするためには、教員が自身の職務をどのように捉えているのかを明らかにしておくことも必要のように思われる。

本稿では、小学校、中学校、高等学校、そして、特別支援学校の教員が、教員の職務の必要性をどのように捉えているのかについて質問紙調査を行った結果を報告する。

方法

１．対象

岐阜県内公立学校教員333名（小学校５校99名、中学校３校62名、高等学校２校57名、特別支援学校１校115名）

２．時期・手続き

2012年7月から8月、各学校長への説明・許諾後、岐阜県内公立学校教員374名（小学校５校109名、中学校３校66名、高等学校２校72名、特別支援学校１校127名）にて留置法にて質問紙調査を実施した。自由意志での回答、匿名性などを文書で示し、同意者が参加した。（回収率89.04％）

３．調査内容

・フェースシート：性別、年齢、職名、勤務校種、所持している教員免許状、教員歴、

・職務の必要性に関する質問用紙：北神・高木・田中（2000）に中学校教員を対象にして行った質問項目を基にし、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校に勤務経験のある現職教員10名が職務内容、表現を４校種いずれにも該当するように考慮し、必要性が高いと思われる職務33項目、必要性が低いと思われる職務55項目を選定した。回答は、最近６か月間の回答者自身の勤務状況を振り返り、「経験がない（０点）」から「すごく思う（５点）」の６件法とした。

４．分析方法

教員の職務の必要性の捉えの因子構造を検討するために、必要性が高いと思われる職務33項目、必要性

が低いと思われる職務55項目への回答について因子分析を行った。初期解の推定には最尤法を用いて、因子の回転としてプロマックス法を用いた。因子数はカイザーガットマン基準とスクリープロット基準に従って決定した。ただし、因子への関与がないとされる因子負荷量｜.40｜に満たない項目を削除し、再解析した。統計解析には SPSSver.22.0を用いた。

結果

1．教員が必要性が高いと捉えている教員の職務

全項目がシャピローウィルク検定にて正規分布に従わないことが確認された。しかし、因子分析に変わるノンパラメトリック法は存在しないため、因子分析を行うこととした。なお、ヒストグラムで特に逸脱したデータがないことを確認した。

因子負荷量｜.40｜に満たない項目が生じなくなるまで7回の解析を行った。その結果、4因子が示され、回転後の因子負荷量は表1のとおり、20項目いずれも｜.40｜以上であった。KMO 測度は.928で、バートレットの球面性検定は $p<.01$ で有意に単位行列とは異なり、因子分析を適用させることの妥当性が保証された。

第1因子は「児童生徒の健康観察」「児童生徒を支えるための保護者との連携の強化」「児童生徒一人ひとりに応じた活躍の場の配慮」などで構成されており、＜教育活動の土台つくり＞の因子と命名した。第2因子は「日常での児童生徒一人ひとりとのコミュニケーションの育成」「集団の中で適切に自分を主張できる力の育成」「定期的に機会を設けての児童生徒とのコミュニケーション」などで構成されており、＜コミュニケーション力の育成＞の因子と命名した。第3因子は「地域の教育力向上や意識作り」「部活やクラブ活動などを通しての地域との関わり」「専門の部活動担当」「過保護にならないなどの適切な家庭の教育力向上の支援」などで構成されており、＜地域・家庭との連携＞の因子と命名した。第4因子は「児童生徒の最低限度のマナーや社会性の育成」「様々な学習水準の児童生徒にあった授業の工夫」「学力水準に合わせた補習・学習プログラム」などで構成されており、＜基礎的な力の育成＞の因子と命名した。

2．教員が必要性が低いと捉えている教員の職務

全項目がシャピローウィルク検定にて正規分布に従わないことが確認された。しかし、因子分析に変わるノンパラメトリック法は存在しないため、因子分析を行うこととした。なお、ヒストグラムで特に逸脱したデータがないことを確認した。

表1　教員が必要性が高いと捉えている教員の職務の因子構造

項　目	因　子			
	＜教育活動の土台つくり＞	＜コミュニケーション力の育成＞	＜地域・家庭との連携＞	＜基礎的な力の育成＞
1　児童生徒の健康観察	.768	.142	-.203	-.009
2　児童生徒を支えるための保護者との連携の強化	.744	.061	.014	.003
3　児童生徒一人ひとりに応じた活躍の場の配慮	.731	.021	-.102	.120
4　連絡帳などを通しての保護者とのコミュニケーション	.707	-.115	-.031	.072
5　不登校児童生徒への指導支援	.610	.062	.048	-.045
6　家庭との密接な連絡	.540	--.063	.146	.112
7　日常での児童生徒一人ひとりとのコミュニケーションの育成	.084	.876	-.137	.018
8　集団の中で適切に自分を主張できる力の育成	-.118	.837	.044	.072
9　定期的に機会を設けての児童生徒とのコミュニケーション	.077	.644	.163	-.054
10　人の気持ちや痛みがわかるような心の力の育成	.052	.544	.061	.121
11　教員自らのコミュニケーション能力や技術の育成	.196	.522	.207	-.086
12　地域の教育力向上や意識作り	.260	-.104	.727	-.067
13　部活やクラブ活動などを通しての地域との関わり	-.065	-.005	.632	.065
14　専門の部活動担当	-.269	.075	.607	.099
15　過保護にならないなどの適切な家庭の教育力向上の支援	.413	.020	.505	-.135
16　児童生徒のボランティアなど地域に参加する意識作り	-.018	.118	.475	.114
17　児童生徒の最低限度のマナーや社会性の育成	.114	.006	-.022	.682
18　様々な学習水準の児童生徒にあった授業の工夫	.132	.130	-.118	.648
19　学力水準に合わせた補習・学習プログラム	-.128	-.041	.235	.643
20　教科指導上の教師間情報交換	.197	.018	.104	.510

表２　教員が必要性が低いと捉えている教員の職務の因子構造

項目	因子					
	＜授業以外の業務＞	＜地域・保護者への過度な対応＞	＜部活動指導の過負担＞	＜外部への過度な対応＞	＜向学心の低い児童生徒への対応＞	＜保護者の過剰要請への対応＞
1　児童生徒会や委員会の担当	.831	-.063	-.038	.035	-.049	.039
2　集団の中での児童生徒の社会性の育成を目指した指導	.811	-.056	-.042	-.120	.094	-.071
3　専門教科以外の授業参観	.797	.060	-.021	.189	-.195	-.124
4　学級通信の作成・配付	.770	.002	-.118	.058	-.034	.024
5　ノートを取る、忘れ物をしないなど基本的な学習態度の保障	.748	-.077	.021	-.153	.127	.054
6　児童生徒に問題行動があった等の臨時の家庭訪問	.747	-.023	.056	-.013	.071	.014
7　修学旅行などの宿泊を伴う校外行事引率	.735	-.157	.116	-.003	.077	-.037
8　校内の授業研究	.719	.012	-.038	.082	-.067	-.014
9　児童生徒に自分の言動には責任を持たせる社会的責任の指導	.713	-.092	.004	-.053	.077	.035
10　週一回の職員の打ち合わせ	.670	-.065	-.055	.207	-.140	-.032
11　該当学年以前の学力保障	.632	.207	-.058	-.134	.214	-.083
12　登校地域での交通指導	.478	.303	.135	.015	.007	-.053
13　不登校などの児童生徒への進路・学習保障の努力	.469	.159	.025	-.155	.437	-.038
14　教科外・専門外の指導や対応	.466	.421	.083	.071	-.258	.026
15　保護者の理解や要請を受けた勤務時間外の不登校児の家庭訪問	.448	.228	.052	-.037	.249	.060
16　通常の年度始めの家庭訪問	.422	.084	-.064	.246	.012	.131
17　苦情だけ学校に言ってくる地域への対応	-.098	.800	.020	-.022	.121	.019
18　教育委員会・PTA から来る現場とかけ離れた要請への対応	-.200	.787	.002	.101	.130	-.061
19　本来は家庭で行うべき児童生徒の私生活の指導	.116	780	-.056	-.238	.033	.122
20　直接学校と関係のないことでの地域の義理立て	-.134	.719	.036	.147	.074	-.137
21　学校が多忙な時の研修への参加	-.070	.661	-.009	.067	-.135	.059
22　保護者ができないような躾への学校の対応	.196	.613	.056	.035	-.123	.073
23　集団場面で勝手な主張をする親への対応	-.085	.553	-.069	-.013	.307	.109
24　行政研修への参加	-.006	.498	-.059	.407	-.105	-.017
25　土曜日、日曜日などの勤務時間外の部活指導	.010	-.050	.960	-.053	-.044	.037
26　部活動の顧問になるなどの職務負担	.102	-.145	.936	.022	-.055	.013
27　専門外の部活動担当	-.153	.189	.784	-.045	.034	-.021
28　宿泊を伴う部活遠征などの引率	-.080	.055	.774	.058	.045	-.014
29　勤務時間外の企業への訪問	-.011	-.062	-.041	.833	.014	.081
30　児童生徒の資格取得のための授業外での指導	.003	-.059	-.005	.645	.299	-.023
31　校外研修のもちまわりでの報告	.135	.151	.014	.591	-.111	.074
32　児童生徒が参加する少年団等の大会の応援	-.056	.233	.022	.532	.028	.068
33　ホームページの作成	.060	.136	.048	.519	.031	-.022
34　民間の模擬試験や学力調査、資格検定の実施	-.015	.085	.011	.518	.326	-.150
35　授業妨害をする児童生徒への学力保障	.013	.201	-.111	-.088	.769	-.025
36　授業を開始する際，児童生徒を教室へ入れるための巡回	.045	-.093	.018	.183	.613	.070
37　児童生徒本人の意思の不明確な進路相談	.067	-.087	.056	.095	.549	.091
38　学力につまずきが見られる児童生徒のための進路指導	.460	-.307	.019	.036	.508	.054
39　学習意欲のない児童生徒への補習・再試験	.083	.176	.041	.049	.502	-.017
40　遅刻防止や無断外出防止のための校門での指導	.069	.017	.049	.255	.499	-.040
41　保護者が教師へ要請する校外の生活指導	-.076	.143	-.040	.057	.071	.814
42　夜間に自宅にかかる保護者からの電話への対応	-.007	.128	.086	.050	.021	.572

因子負荷量｜.40｜に満たない項目が生じなくなるまで3回の解析を行った。その結果、6因子が示され、回転後の因子負荷量は表2のとおり、42項目いずれも｜.40｜以上であった。KMO測度は.945で、バートレットの球面性検定はp<.01で有意に単位行列とは異なり、因子分析を適用させることの妥当性が保証された。

第1因子は「児童生徒会や委員会の担当」「集団の中での児童生徒の社会性の育成を目指した指導」「専門教科以外の授業参観」「学級通信の作成・配付」「ノートを取る、忘れ物をしないなど基本的な学習態度の保障」「児童生徒に問題行動があった等の臨時の家庭訪問」「修学旅行などの宿泊を伴う校外行事引率」などで構成されており、< 授業以外の業務 > の因子と命名した。第2因子は「苦情だけ学校に言ってくる地域への対応」「教育委員会・PTAから来る現場とかけ離れた要請への対応」「本来は家庭で行うべき児童生徒の私生活の指導」「直接学校と関係のないことでの地域の義理立て」などで構成されており、< 地域・家庭への過度な対応 > の因子と命名した。第3因子は「土曜日、日曜日などの勤務時間外の部活指導」「部活動の顧問になるなどの職務負担」「専門外の部活動担当」などで構成されており、< 部活動指導の過負担 > の因子と命名した。第4因子は「勤務時間外の企業への訪問」「児童生徒の資格取得のための授業外での指導」「校外研修のもちまわりでの報告」「児童生徒が参加する少年団等の大会の応援」などで構成されており、< 外部への過度な対応 > の因子と命名した。第5因子は「授業妨害をする児童生徒への学力保障」「授業を開始する際、児童生徒を教室へ入れるための巡回」「児童生徒本人の意思の不明確な進路相談」「学力につまずきが見られる児童生徒のための進路指導」「学習意欲のない児童生徒への補習･再試験」などで構成されており、< 向学心の低い児童生徒への対応 > の因子と命名した。第6因子は「保護者が教師へ要請する校外の生活指導」「夜間に自宅にかかる保護者からの電話への対応」で構成されており、< 保護者の過剰要請への対応 > の因子と命名した。

まとめ

今回の教員による教員の職務の必要性について捉えに関する調査研究より、教員が必要性が高いと捉えた教員の職務として < 教育活動の土台つくり >< コミュニケーション力の育成 >< 地域・家庭との連携 >< 基礎的な力の育成 > の4因子が、教員が必要性が低いと捉えた教員の職務として < 授業以外の業務 >< 地域・家庭への過度な対応 >< 部活動指導の過負担 >< 外部への過度な対応 >< 向学心の低い児童生徒への対応 >< 保護者の過剰要請への対応 > の6因子が明らかになった。

必要性が高いとした教員の職務の因子はいずれも児童生徒との教育活動を支える基盤となるものであり、教師が教育活動の高まりを志向する姿が明らかになった。それに対し、必要度が低いとされた教員の職務の因子は教育活動に直接的に関わる2因子 < 授業以外の業務 >< 向学心の低い児童生徒への対応 > と、それ以外の4因子 < 地域・家庭への過度な対応 >< 部活動指導の過負担 >< 外部への過度な対応 >< 保護者の過剰要請への対応 > から構成された。

必要性が低いとした < 授業以外の業務 >< 向学心の低い児童生徒への対応 > は、必要性が高いとした < 教育活動の土台つくり >< コミュニケーション力の育成 >< 基礎的な力の育成 > の遂行を妨げるような要因になりかねないものであり、その職務に時間を裂きたくないとの思いの現れと思われる。また、必要性が低いとした < 地域・家庭への過度な対応 >< 部活動指導の過負担 >< 外部への過度な対応 >< 保護者の過剰要請への対応 > は、必要性が高いとした < 地域･家庭との連携 > を遂行するに当たり、互いに肯定的な関係の中で、過度の負担なく展開したいとの教師の志向が示されたものと考える。

今後は、本報告で明らかになった小学校、中学校、高等学校、そして、特別支援学校の教員共通な教員の職務の必要性についての捉えを踏まえ、校種、職務、年齢などの要因による差異についても検討を進める。そして、教員自身の職務の捉えのあり様、更には、それを踏まえた研修内容・方法についても検討していきたい。

謝辞　校務多忙の中、本調査に協力いただいた先生方にお礼申し上げます。

文献

1）中央教育審議会教員の資質能力向上特別部会（2011）：教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（審議経過報告）.
2）北神正行・高木　亮・田中宏二（2000）：中学校教師の職務「必要」性・「不必要」性認識に関する研究. 岡山大学教育学部研究集録. 115、149-158.
3）教員免許更新制度の改善に係る検討会議（2013）：教員免許更新制度の改善について（中間取りまとめ）.